

令和 6 年 6 月 18 日現在

機関番号：11302

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00700

研究課題名（和文）フィードバックの効果：外国語学習に影響を与える要因の解明

研究課題名（英文）Effectiveness of feedback: Investigations into variables affecting second language learning

研究代表者

鈴木 渉 (Wataru, Suzuki)

宮城教育大学・大学院教育学研究科高度教職実践専攻・教授

研究者番号：60549640

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：筆記訂正フィードバックは第二言語作文の正確さを向上させる効果があるとされ、約30年間の研究によりその有効性が徐々に認識されています。このフィードバックの効果には様々な要因が影響を与えることが分かっており、それには筆記訂正フィードバックの種類や目標言語項目の種類、作文の形式、書き直しの有無などの外部要因と、学習者の習熟度や不安感などの内部要因が含まれます。本研究では、特に直接的な筆記訂正の効果、言語項目や学習者がフィードバック処理時に考えたことや感じたことに、関連していることが示されました。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、第二言語作文における筆記訂正フィードバックの効果と、その影響を受ける要因を探求しています。本研究を通して、筆記訂正フィードバックは一般に作文の正確さを向上させますが、その効果は言語項目の種類やフィードバック処理時の学習者の感情や認知によって変わる可能性があることを示唆している点に学術的な意義があります。本研究を通して、教師は筆記訂正フィードバックを行う際にはどの項目にフィードバックするのか、学習者の感情や認知に寄り添うサポートが重要であることを示唆している点が社会的意義になります。

研究成果の概要（英文）：Written corrective feedback has been found to improve the accuracy of second language writing, with its effectiveness gradually recognized over approximately 30 years of research. Various factors influence the effectiveness of this feedback, including the type of corrective feedback, the type of target language items, the format of the composition, and whether there is rewriting involved. External factors such as these, along with internal factors like the learner's proficiency and anxiety, play a role. This study shows that the impact of direct written corrective feedback is associated with the language items and the thoughts and feelings of the learners during the feedback processing.

研究分野：第二言語習得論

キーワード：筆記訂正フィードバック フィードバック処理の認知 フィードバック処理の感情 書き直し 新作文
言語項目 直接訂正 第二言語習得

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

学習者の第二言語作文のエラーに対し、教師が書面でのフィードバックである written corrective feedback (WCF) を行うことは、学習者の正確さの向上や維持に効果があるかどうか、その効果を促進または阻害する要因を解明することが重要である。これまでの研究によれば、まず、WCF は正確さを向上・維持させる効果があることが示されている。次に、WCF の効果に学習者内外のさまざまな要因が影響を及ぼすことも徐々に明らかになってきている。学習者外要因としては、WCF の種類、目標言語項目の種類、作文の種類、書き直しの有無、WCF の効果を測定するタイミングなどが挙げられる。学習者内要因としては、習熟度、適性、不安、処理の深さなどが挙げられる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、WCF の効果を検証し、言語項目の種類や処理時の思考および感情がその効果にどのように影響するかを明らかにすることである。

3. 研究の方法

(1) 協力者

宮城県内のある大学で工学を学んでいる 2 年生 34 名 (年齢は 18、19 歳) がこの研究に参加した。実験当時、協力者は週に 1 回 90 分の英作文講義を受講していた。大学で実施された TOEFL IP テストの結果によると、参加学生の英語力は CEFR の B2 から C1 レベルに相当していた。

(2) 手続き

実験は 4 週間にわたり行われた。1 週目に、協力者は研究同意書に署名した。2 週目には、講義内で英作文の初稿を書くことを求められた。3 週目には、まず WCF が施された初稿を受け取り、5 分間で WCF を確認するように指示された。5 分後、WCF 付きの初稿は再度回収された。続いて、WCF が施されていない初稿と白紙を受け取り、初稿を白紙に 20 分以内に正しく書き直すように求められた (改稿)。この改稿中、辞書などの使用や他の学生、教員との相談は禁止されていた。改稿後、フィードバックの確認や改稿時の考えや感情についてオンラインアンケートが実施された。4 週目に、新たな作文を作成する (新稿) タスクが与えられ、その作成中に抱いた考えや感情についてオンラインアンケートで質問された。

(3) ディクトグロス、フィードバック、アンケート

ディクトグロス (dictogloss) を用い、200 語程度の文章を 2 度聞いている間にメモを取るよう指示した。そのメモを基にして、聞いた内容を 30 分以内にできるだけ正確に復元するよう求めた。この際、辞書などの使用は認めず、協力者には自力で英文を完成させるように要求した。

本実験で採用した WCF は、協力者の作文の語彙、表現、文法、スペルなどすべてのエラーを対象とし、直接訂正を与えた。例えば、間違った単語には二重線を引き、必要に応じてその近くに正しい単語を書くか、または挿入マークを用いて必要な単語を加えた。

アンケートは、WCF の確認や改稿時に、協力者がどのような認知的、感情的反応を示したかを評価するために使用された。具体的には、認知面では、語彙や表現、文法等の間違いのうちどの間違いなのか、正しい語彙や表現、文法を考えたかどうか、なぜ間違えたのかを、程度や頻度な

どを聞いた。情意面では、WCF の確認や改稿時に、悔しい気持ち、恥ずかしい気持ち、嫌な気持ち、やる気を感じたかをそれぞれ聞いた。また、新稿時に、第3週に受けたWCFについて考えたか、どのようなことを考えたかを聞いた。さらに、一般的に英作文を行うときにどんなことに注意するか、どのフィードバックが有効だと思うか・好むか、改稿についても質問した。アンケートは、リッカートスケールの4件法を採用した(例:4:強くそう思う、3:そう思う、2:そう思わない、1:全くそう思わない)。

(4) 分析と統計

初稿、改稿、新稿において、仮定法、冠詞、その他の3つのカテゴリーにおける正確さを算出した。

仮定法のIf節では、have + past participleで1点、hadで0.5点、正しいpast participleで0.5点を加点し、合計2点とした。主節では、wouldで1点、have + past participleで1点、現在形のhaveで0.5点、正しいpast participleで0.5点を加点し、合計3点となる。これらの点数を、仮定法を用いた文数と最高得点(5点)で割ることにより、正確さ率を算出した。

冠詞の正確さは、正しい冠詞の使用数を必要な場合と不要な過剰使用の合計で割り、それに100を掛けて算出した。

仮定法と冠詞以外のエラーは「その他」とし、単純にエラー数を数えた。

フィードバックの効果を分析するため、SPSS (ver. 27) で時期(3水準: t1, t2, t3)を因子とする分散分析を施行した。有意な効果が見られた場合にはBonferroni 下位検定を施行した。次に、JASP (ver. 0.16.3) を使用して、WCFの効果と認知・情動反応の関連を探るため、差分値(t2-t1, t3-t2, t3-t1)を目的変数とする重回帰分析(ステップワイズ法)を実施した。

4. 研究成果

仮定法の正確さは初稿で35.8%、改稿で90.4%、新稿で71.3%であった。分散分析の結果、時期の効果が有意であった($p < .001$)。下位検定では初稿と改稿、初稿と新稿の差は有意であったが、改稿と新稿の差は有意ではなかった。

冠詞の正確さは初稿で60.3%、改稿で88.8%、新稿で52.3%であった。分散分析の結果、時期の効果が有意であった($p < .001$)。下位検定では初稿と改稿、改稿と新稿の差は有意であったが、初稿と新稿の差は有意ではなかった。

その他のエラー数は初稿で13.8個、改稿で4.8個、新稿で5.5個であった。分散分析の結果、時期の効果が有意であった($p < .001$)。下位検定では初稿と改稿、初稿と新稿の差は有意であったが、改稿と新稿の差は有意ではなかった。これらの結果は、WCFが特定の項目やさまざまな項目の正確さの向上・維持に効果があること、そしてWCFの効果は言語項目によって異なることを示唆している。したがって、英語教師は、特定の言語項目の特徴を見極めながら、適切にWCFを施すことが必要であろう。

初稿から改稿への正確さ向上については、冠詞において「悔しさ」と「自分自身がなぜ間違っただかについてうまく考えることができたか」の負の関連、「嫌な気持ち」と「訂正を受けた箇所について正しい語彙や表現、文法等を考えたこと」の正の関連が認められた。「その他」のエラー数減少は「悔しさ」と負の関連が見られた。改稿から新稿への正確さ維持については、冠詞のみで「悔しさ」の正の関連が認められた。初稿から新稿への正確さの向上については、「その他」についてのみ「悔しさ」と負の関連が見られた。これらの結果は、WCFの確認や改稿時に考えたことや感じたことが、WCFの効果にさまざまな影響を及ぼすことを示唆している。したがって、

英語教師は、学習者が WCF の確認や改稿時にどのようなことを考え、感じているのかに寄り添いながら、必要に応じて適切な支援をしていくことが求められる。

本研究は探求的な性格を持ち、いくつかの問題点を抱えている。第 1 に、統計分析対象は限られた少ない協力者であるという点である。第 2 に、今回用いた心的反応項目は、標準化された心理スケールではなかった点である。第 3 に、アンケート項目での改稿や新稿の感情表出や認知プロセスの解明のみに留まった点である。これらの問題点にもかかわらず、本研究は WCF が第二言語作文の正確さの向上・維持に効果があること、また、その効果が言語項目の種類や学習者の認知的及び情意的な処理の仕方によって影響される可能性を示唆した点で価値があると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 齋藤玲・鈴木渉	4. 巻 42
2. 論文標題 第二言語ライティングにおける書記訂正フィードバックとその振り返り、書き直しに関する態度と行動： 認知モデルの提案と予備的調査の報告	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東北英語教育学会紀要	6. 最初と最後の頁 49-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 齋藤玲・鈴木渉
2. 発表標題 L2ライティング学習における態度の個人差：認知モデルの提案と調査報告
3. 学会等名 全国英語教育学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 鈴木渉
2. 発表標題 ライティング研究における筆記データ - 理論・方法・実践 -
3. 学会等名 外国語教育メディア学会関西支部メソドロジー研究会2022年度第2回研究会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 大城賢・鈴木渉	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東洋館出版	5. 総ページ数 292
3. 書名 イラストで見る全単元・全時間の授業のすべて 外国語 中学校2年	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	齋藤 玲 (Saito Ryo) (20896998)	東北大学・情報科学研究科・助教 (11301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------